

小城三月（小さな街の三月）

蕭 紅

（訳 小林美恵子）

三

翠叔母は我家では私と同じ部屋に泊った。月夜には部屋は明るく照らされ、翠叔母と私は、よく一番鶏が鳴くまで、夜が更けるのも忘れておしゃべりをした。

鶏が鳴くと、ようやく言う。「早く寝よう。夜が明けちゃうわ」

ある時、こちらに体を向けて彼女は聞いた。

「結婚があまり早いのは良くないかしら。多分女の子にとって結婚が早すぎるのは良くないわ！」

私たちは前にもいろいろ話したが、こんな話をしたことはなかった。

いつも話したのは、どんな洋服がいいか、どんな靴を買おうか、色をどう合わせようかとかいうことで、毛糸を買ってくればどんな模様に編もうかと話し、帽子を買ってくれば、この帽子にちょっとした欠点があるのをどう判定すべきか、欠点は結局どこにあるのか、たいしたことはないとしても、あるいは全然大丈夫だとしても、やはりどうしたって問題は問題だと話した。

ときにはもう少し違うことを話すこともあった。それは従姉妹たちが婚約したり、また親戚の誰かが嫁入りをしたことだったりした。または耳にした噂、新婚の嫁と、舅姑が意見が合わずもめているということなどだ。

そのころ、私たちの町にはすでに西洋式の学校があった。小学校は幾つかあったが、大学はなかった。男子中学が一つだけあり、たびたび話題になった。話すのは翠叔母だけでなく、祖母も叔母も、姉たちもで、誰もがその中学生たちについてとやかく言いたがった。というのも彼らがすっかり西洋化して、ズボンをはき、裾をちょっと捲り上げて、口を開くと「グ

ッドモーニング」と外国語、彼ら同士がしゃべる「ダダダ」はロシア語か何かということらしかった。しかもさらに変なのは彼らが女性を見ても恥ずかしがらなかったことだ。この点についてみんなは昔のほうがよかったと批判した。昔の書生は女性を見ると顔を赤くしたものだ。

我が家は最も開明的だったと思う。叔父や兄たちは皆、北京やハルビンなどの大都市で学んでいた。彼らは広い視野を持つようになった。家に帰って来ると、都会では男女が一緒に学んでいると教えてくれた。

この話題はとても珍しく、最初は皆、これは反逆だと思った。その後叔父もよく女子同級生と文通をしたし、叔父は家庭内で重きを置かれていたし、それに父が昔国民党に加入して革命をしたこともあって、この家庭には「咸興維新〔すべてを改革する気風〕」が起こったのだ。

それゆえ我家は何事につけ自由で、公園をぶらぶらしたり、正月十五日元宵に花灯を見るのも男女別々にではなく、みんなで行った。

また、我家にはテニスコートがあり、一日中、遅くまでテニスをしたが、親戚の男の子たちが来て、私たちもみんな一緒だった。それはともかく、翠叔母の話が続けよう。

翠叔母はたくさん話を聞いていた。男子学生の結婚に関してはこの町ではすでにいくつか不幸な話があった。ある人は結婚してすぐに家に帰らなくなり、ある人は妻を迎えたが、その妻を別の部屋に住まわせて、自分はずっと書齋に寝泊りしていた。

このような話を聞くと、たいがいの人は女性の立場に立って、その男たちは学問して悪くなったと言う。彼らは無学な人や女子学生ではない人々を見て腹を立てる。いたるところ彼に及ばないと思うのだ。いつも結婚とは不自由なものだと言われるのが、昔から今に至るまで、父親が娘を結婚させてきたのだ。なのに、あいにくいまだに自由は求められている。見よ、自由はまだないではないか。あれこれ理由をつけて、妻を娶った人が家に帰らなかったり、妻を別室に放りっぱなしにしたり、これらはみな学問

をして悪くなったのだ。

翠叔母はたくさん他人の批判を聞いた。彼女の心には疑問が沸き起こったのだろう、彼女はそこで私に学問をしない人は悪くないのと聞き、私はもちろん、悪いと言った。それに彼女は我が家の男の子も女の子も全部学校に行って勉強するのを見ていた。さらに私たちの親戚の子どもたちも皆学問をしていた。

だから彼女は私に感服していた。私が学問をしていたからだ。

しかしまもなく翠叔母は婚約した。これは彼女の妹が結婚してまもなくのことだった。

彼女の未来の夫に私は会ったことがある。母方の祖父の家でのことだった。その人は背か低く小柄で、青い綿の長衣に黒の短い上着を着て、頭には大型馬車の車夫がかぶるような五耳帽子〔防寒帽の一種〕をかぶっていた。

そのとき翠叔母もいたのだが、彼女はその人がどういう人か知らず、ただ田舎から来たお客だとだけ思っていた。母方の祖母はこっそり私を呼んで、わざわざ私にその人が翠叔母の夫になる人だと告げた。

まもなく翠叔母は金持ちになった。彼女の夫の家は妹の夫の家よりさらに金持ちだった。姑は寡婦で一人息子を育てていた。息子は十七歳で、田舎の私塾で勉強していた。

翠叔母の母親はいつも翠叔母のために言った。背が小さくても心配ない、まだ若いんだから二、三年のうちにはもっと大きくなって二人とも普通並みの背丈になると。悲しむことはない、婚家が金持ちなのが何よりだと翠叔母を励ました。結納金は十万以上が届けられ、そのうえ彼女の母つまり私の祖母によって手ずから翠叔母に渡された。さらにもう一つ別の条件が約束され、それによれば、三年以内には決して結婚はしないということで、これは男の側からはまだ若すぎるからということだったが、翠叔母は結婚をさらにずっと先に延ばしたいと願っていた。

翠叔母は婚約してからとてもお金持ちになり、どんな新式のものでも、

決して先を争って買いに行くわけでもなく、いくらもたたないうちにちゃんと箱に納まるのだった。その夏、最も流行った銀灰色の金巾の丈長の上着は、翠叔母が着ると最高にすてきで、彼女は何枚も持っていたので、二回着て新しくなくなってくるともう着るのをやめて、家の中だけで着て、でかけるときにはまた新しく作るのだった。

そのころ、ちょうど長く垂れた耳飾りが流行っていたが、翠叔母は二組持っていて、一つはルビー、もう一つはエメラルドだった。私の母もなんとか二組持ち、私も一組は持っていた。そうしてみると翠叔母がもっとも贅沢だったということがわかる。

また、そのころもうすでにハイヒールが流行り出していた。しかし私の街では多くの人履いているわけではなく、ただ私の継母が早くから履きはじめ、もう一人は翠叔母ということになった。私の母が金持ちだったというわけでもなく、ハイヒールがひどく高価だったというわけでもなく、女性たちはそんなモダンな行動はとらなかつただけだし、言い換えれば簡単に新しい考えを受け入れなかつたのだ。

翠叔母がハイヒールを履き始めた一日目、歩くのもまだまだ危なっかしかったが、二日目にはちょっと慣れてきた。三日めがくると、つまるところ、彼女はもう走り出してさえ、すっかり安定した。そのうえ歩く姿はいかにも可愛らしかった。

私たちはときどきテニスをして遊んだが、ボールが彼女の顔にぶつかりそうになって、彼女はようやくラケットでさえぎる。そうでなければ長いことボール一つ打つでなかつた。なぜなら彼女はコートに上がり白線の上に立てば白線の上に、コートの中に立てばその中にいて全然動かなかつたのだ。あるときにはただテニスラケットを持ち立ったままよその景色に顔を向けてしまった。わけても、みんながテニスを終え、食べに行くものは食べに行き、顔を洗うものは洗いに行ってしまったあと、ただ彼女だけが低い垣根の前に立って遠いハルビンの街を夢中になって見ていたりした。

一度、私と翠叔母はお呼ばれをした。継母の親戚の嫁取りだ。その一家は八旗人で、満州族でもあり、満州族は見栄にこだわるので、一族の若い嫁たちはみな出席を求められ、それぞれが華やかに着飾っていた。私たち中国の社会では、こんなに華やかな社交の場はないようだ。そのとき私は子どもだったので、何もが特別華やかに思われたのかもしれない。殊に女性たちの着物について言えば、それぞれが今の西洋の女性のイブニングドレスのような厳かないでたちだった。誰もが一様に刺繍のついた上着を着ていた。彼女たちは八旗人なので、着物の身頃にはスリットがなくて、しかもとても長い。上着の色は棗紅色が多かったが、深紅もあり、バラ色もあった。また、その表面の刺繍は、あるものはハス、あるものはバラ、あるものは松竹梅で、ともかく特別に華やかだった。

彼女たちは顔に白粉をつけ、みなピンクの口紅をつけていた。お客が門前に着くたびに彼女たちは列を作って出迎えなくはならなかった。

彼女たちはみな私のおば〔母方のおじの妻〕たちで、一人ひとり進み出て私と翠叔母に挨拶をした。

翠叔母は以前から彼女たちをよく知っていて、あるものをいとこ姉さんと呼び、あるものを四番目のお姉さんと呼んだ。でも私にとっては、彼女たちはみな同じようで、小さいころに遊んだ切り紙の人形のように、この人もあの人もみな同じで、まったく見分けがつかなかった。皆、色模様の緞子の着物、真っ白な顔、赤い口唇だったのだ。

翠叔母はこのとき目立つ行動をした。部屋に入って、大きな鏡の傍らに寄って座った。

女たちはたちまち彼女を見に寄ってきた。ひょっとして彼女がこれまでこんなにきれいだったことはなかったからかもしれない。今日はみんなを驚かせていた。

私の見たところ、翠叔母はまだ前ほどきれいではなかった。でもみんな彼女をまるで咲きはじめた蠟梅のようにきれいだと言った。翠叔母はずっ

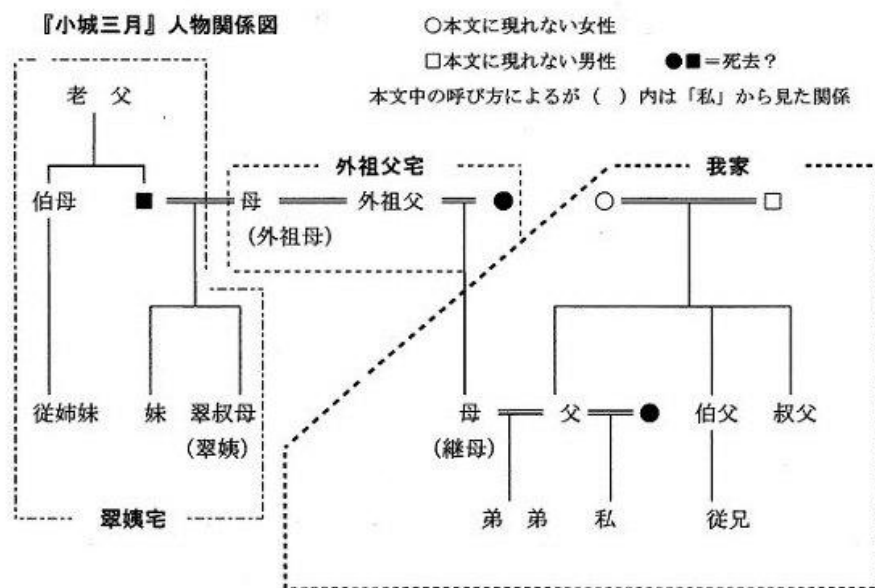
と紅白粉もつけなかったし、この日も結婚のために作った一着をまた着ていて、その青い緞子は金色の花模様の袴だった。

翠叔母はみんなに囲まれ見られて、決まりが悪くなり、立ち上がって逃げてしまおうと、思い切って一步踏み出し、ぼんやりと、先にある一間に進み入って避けようとした。

誰がそこを新婚夫婦の寝室と知っていたらどうか。そこで大勢の、兄嫁たちが大声で呼び止め、言った。

「翠姉さん、あわてないで。来年はきれいなお嫁さんになるんだから。今はちょっと見ておくれよ。」

その日、食事時になると、多くの客は別室から来ると、翠叔母をあっけにと取られて見ていた。翠叔母は箸を上げ、考えにふけているようで、落ち着いた態度、おとなしい目つきで彼女たちを見ている。彼女はみんながもっぱら自分を見ているのがわからないようだった。でも別の女性たちは翠叔母をいつまでも羨んだ。表情が突然冷ややかになり、何かを言いたいようでもあり、だが何も言わず、その後は互いに目を見合わせて、ちょっと笑い、料理を食べるのだった。





(中国語原文) 小城三月 萧红

三

翠姨在我家，和我住在一个屋子。月明之夜，屋子照得通亮。翠姨和我谈话，往往谈到鸡叫，觉得也不过刚刚半夜。

鸡叫了，才说：“快睡吧，天亮了。”

有的时候，一转身，她又问我：

“是不是一个人结婚太早不好，或许是女子结婚太早是不好的！”

我们以前谈了很多话，但没有谈到这些。

总是谈什么衣服怎样穿，鞋子怎样买，颜色怎样配；买了毛线来，这毛线应该打个什么花纹；买了帽子来，应该评判这帽子还微微有点缺点，这缺点究竟在什么地方，虽然说是不要紧，或者是一点关系也没有，但批评总是要批评的。

有时再谈得远一点，就是表姊表妹之类订了婆家，或是什么亲戚的女儿出嫁了。或是什么耳闻的，听说的，新娘子和新姑爷闹别扭之类。

那个时候，我们的县里，早就有了洋学堂了。小学好几个，大学没有。只有一个男子中学，往往成为谈论的目标。谈论这个，不单是翠姨，外祖母，姑姑，姐姐之类，都愿意讲究这当地中学的学生。因为他们一切洋化，穿着裤子，把裤腿卷起来一寸，一张口，“格得毛宁”外国话，他们彼此一说话就“答答答”，听说这是什么俄国话。而更奇怪的就是他们见了女人不怕羞。这一点，大家都批评说是不如从前了，从前的书生，一见了女人脸就红。

我家算是最开通的了。叔叔和哥哥他们都到北京和哈尔滨那些大地方去读书了，他们开了不少的眼界。回到家里来，大讲他们那里都

是男孩子和女孩子同学。

这一题目，非常的新奇，开初都认为这是造了反。后来因为叔叔也常和女同学通信，因为叔叔在家庭里是有点地位的人。并且父亲从前也加入过国民党，革过命，所以这个家庭都“咸与维新”起来。

因此在我家里一切都是很随便的，逛公园，正月十五看花灯，都是不分男女，一齐去。

而且我家里设了网球场，一天到晚地打网球，亲戚家的男孩子来了，我们也一齐地打。

这都不谈，仍旧来谈翠姨。

翠姨听了很多的故事。关于男学生结婚的事情，就是我们本县里，已经有几件事情不幸的了。有的结婚了，从此就不回家了，有的娶来了太太，把太太放在另一间屋子里住着，而且自己却永久住在书房里。

每逢讲到这些故事时，多半别人都是站在女的一面，说那男子都时念书念坏了，一看了那不识字的又不是女学生之类就生气。觉得处处都不如他。天天总说是婚姻不自由，可是自古至今，都是爹许娘配的，偏偏到了今天，都要自由，看吧，这还没有自由呢，就先来了花头故事了，娶了太太的不回家，或是把太太放在另一个屋子里。这些都是念书念坏了的。

翠姨听了许多别人家的评论。大概她心里边也有些不平，她就问我不读书不是很坏的，我自然说是很坏的。而且她看了我们家里男孩子、女孩子通通到学堂去念书的。而且我们亲戚家的孩子也都是读书的。

因此她对我很佩服，因为我是读书的。

但是不久，翠姨就订婚了。就是她妹妹去嫁不久的事情。

她的未来的丈夫，我见过。在外祖父的家里。人长得又低又小，穿一身蓝布棉袍子，黑马褂，头上戴一顶赶大车的人所戴的五耳帽子。

当时翠姨也在的，但她不知道那是她的什么人，她只当是哪里来

了这样一位乡下的客人。外祖母偷着把我叫过去，特别告诉了我一番，这就是翠姨将来的丈夫。

不久翠姨就很有钱，她的丈夫的家里，比她妹妹丈夫的家里还更有钱得多。婆婆也是个寡妇，守着个独生的儿子。儿子才十七岁，是在乡下的私学馆里读书。

翠姨的母亲常常替翠姨解说，人矮点不要紧，岁数还小呢，再长上两三年两个人就一般高了。劝翠姨不要难过，婆家有錢就好的。聘礼的钱十多万都交过来了，而且就由外祖母的手亲自交给了翠姨；而且还有别的条件保障着，那就是说，三年之内绝对的不准娶亲，借着男的一方面年纪太小为辞，翠姨更愿意远远的推着。

翠姨自从订婚之后，是很有钱的了，什么新样子的东西一到，虽说不是一定抢先去买了来，总是过不了多久，箱子里就要有的了。那时候夏天最流行银灰色市布大衫，而翠姨的穿起来最好，因为她有好几件，穿过两次不新鲜就不要了，就只在家里穿，而出门就又去做一件新的。

那时候正流行着一种长穗的耳坠子，翠姨就有两对，一对红宝石的，一对绿的，而我的母亲才能有两对，而我才有一对。可见翠姨是顶阔气的了。

还有那时候就已经开始流行高跟鞋了。可是在我们本街上却不大有人穿，只有我的继母早就开始穿，其余就算是翠姨。并不是一定因为我的母亲有钱，也不是因为高跟鞋一定贵，只是女人们没有那么摩登的行为，或者说她们不很容易接受新的思想。

翠姨第一天穿起高跟鞋来，走路还很不平稳，但到第二天就比较的习惯了。到了三天，就是说以后，她就是跑起来也是很平稳的。而且走路的姿态更可爱了。

我们有时也去打网球玩玩，球撞到她脸上的时候，她才用球拍遮了一下，否则她半天也打不到一个球。因为她一上了场站在白线上就

是白线上，站在格子里就是格子里，她根本地不动。有的时候她竟拿着网球拍子站着一边去看风景去。尤其是大家打完了网球，吃东西的吃东西去了，洗脸的洗脸去了，惟有她一个人站在短篱前面，向着远远的哈尔滨市影痴望着。

有一次我同翠姨一同去做客。我继母的族中娶媳妇。她们是八旗人，也就是满人，满人才讲究场面呢，所有的族中的年青的媳妇都必得到场，而个个打扮得如花似玉。似乎咱们中国社会，是没这么繁华的社交的场面的，也许那时候，我是小孩子，把什么都看得特别繁华，就只说女人们的衣服吧，就个个都穿得和现在西洋女人在夜会里边那么庄严。一律都穿着绣花大袄。而她们是八旗人，大袄的襟下一律的没有开口。而且很长。大袄的颜色枣红色的居多，绛色的也有，玫瑰紫色的也有。而那上边绣的颜色，有的荷花，有的玫瑰，有的松竹梅，一句话，特别的繁华。

她们的脸上，都擦着白粉，她们的嘴上都染的桃红。

每逢一个客人到了门前，她们是要列着队出来迎接的，她们都是我的舅母，一个一个地上前来问候了我和翠姨。

翠姨早就熟识她们的，有的叫表嫂子，有的叫四嫂子。而在我，她们就都是一样的，好像小孩子的时候，所玩的用花纸剪的纸人，这个和那个都是一样，完全没有分别。都是花缎的袍子，都是白白的脸，都是很红的嘴唇。

就是这一次，翠姨出了风头了，她进到屋里，靠着一张大镜子旁坐下了。

女人们就忽然都上前来看她，也许她从来没有这么漂亮过，今天把别人都惊住了。

依我看翠姨还没有她从前漂亮呢，不过她们说翠姨漂亮得像棵新开的腊梅。翠姨从来不擦胭脂的，而那天又穿了一件为着将来作新娘子而准备的蓝色缎子满是金花的夹袍。

翠姨让她们围起看着，难为情了起来，站起来想要逃掉似的，迈着很勇敢的步子，茫然地往里边的房间闪开了。

谁知那里边就是新房呢，于是许多的嫂嫂们就哗然地叫着，说：

“翠姐姐不要急，明年就是个漂亮的新娘子，现在先试试去。”

当天吃饭饮酒的时候，许多客人从别的屋子来呆呆地望着翠姨。翠姨举着筷子，似乎是在思量着，保持着镇静的态度，用温和的眼光看着她们。仿佛她不晓得人们专门在看着她似的。但是别的女人羡慕了翠姨半天了，脸上又都突然地冷落起来，觉得有什么话要说出，又都没有说，然后彼此对望着，笑了一下，吃菜了。

□□□□□